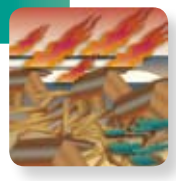


第3章 紀州徳川家の時代



安政の大地震と浜口梧陵

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

安政の大地震と梧陵

1854（安政元）年11月4日、紀伊半島一帯で、強い地震を感じました。これは東海地方を中心にした地震でしたが、広村の人々は驚いて、手もとの衣服などを持って、氏神の広八幡宮の境内などへ避難し、一夜を明かしました。

翌5日は天気がよく海も静かになったので、人々はもう大丈夫だろうと家に帰りました。ところが夕方になってまたはげしい震動がおり、山のような波が押し寄せてきました。村人たちは大あわてに広八幡宮へ逃げました。人々の避難するのを見とどけて、あとに残っていた浜口梧陵は、いったんは津波にさらわれそうになりましたが、やっとのことでぬけ出し、広八幡宮にたどりつきました。

そのころ、まだ暗やみのなかで逃げまどっている人たちのいることがわかりました。梧陵は若者たちに指図して、自分の田に積んでいる稲むらに、次々と火をつけて明るくし、それによって何人もの人が避難することができました。

しかし、この大津波で36人が死亡し、339戸の家が流され、村は悲惨な状態になりました。ほとんどの村人は家を失い、食料はなく、生活に困ってしまいました。

大堤防の築造

このとき、梧陵は災害にあった人々を救うために立ちあがりました。まず自分の家の米200俵を出し、また他の有力者からも米を出してくれるよう働きかけ、家屋を50棟新築して、家を失った村民を住ませました。また漁夫には船や漁具などを買い与えたり、農民には農具を給して荒廃した田畑の改修をすすめるようにしました。



浜口梧陵が築いた堤防

梧陵は、広村が永久に津波に襲われることのないように強固な堤防を築く必要があると考えました。そこで1855年正月、藩に願い出て堤防工事の許可を得ました。

広村の海岸には、古い時代に造られた堤防がありましたが、その背後に大堤防を築く工事が、この年の

* 1 もみをおとしたあとの稲むら。

2月から始まりました。津波で家や家具などの生活用品を失い、生活できにくくなっていた多くの村人が、仕事につけるようにしました。農繁期には工事も中止して、農業を営ませながら、工事は1858年12月まで3年10か月間も続きました。当初の計画は、広川堤まで延長1,000mの予定でしたが、費用の関係で600m位に縮小しました。全工事の延べ人員は、56,736人で、その費用は、銀94貫344匁（1,572両）を要したといわれます。栢陵も多額の私財を出しています。このようにして、津波で荒れた広村を立て直し、将来の災害を防げるようにしました。

高さ5m、幅20mの堤防の海側の下部に松の木を数百本植え、堤防の内側と堤防の上部にはハゼの木を植えました。松は、その後繁茂していきましたが、マツクイムシで枯れ、今の松は2代目になります。

広村では、毎年11月5日に村人が土砂を運んで、堤防の破損したところを修繕していましたが、いつの頃からか土砂運びはしなくなっています。また堤防の一部を通路にして、切り開いていますが、万一のとき海潮が流れ込み、崩壊する心配もあります。そこで、1926（大正15）年に鉄門を設け、鉄のとびらで海潮を防ぐ設備にしました。

またこの堤防は、昭和21年の南海地震のとき、背後の地域を津波から守りました。

広川町では、こうした栢陵の業績に感謝し、その防災精神をうけつぐための行事をおこなってきましたが、2007（平成19）年に、浜口栢陵記念館と津波防災教育センターからなる「稲むらの火の館」をつくり、栢陵の偉業を記念するとともに、今後の津波に備えるようにしています。



浜口栢陵記念館



わかやまの知識



【教科書にのった「稲むらの火」】

太平洋戦争が終るころまでの小学校の国語教科書に、「稲むらの火」という文がのっていました。これは、ある海辺の村で、五兵衛という庄屋が、大地震のあとに津波がくることに気づいて、村人たちが暗いなかを高台へかけのぼれるように、自分の田に積んでいた稲むらにつぎつぎと火をつけ、多くの人の命を救ったという物語です。

明治時代にラフカディオ・ハーン（日本名小泉八雲）という作家が、安政の大地震のさい、浜口儀兵衛（栢陵）が稲むらに火をつけて、村人たちを救ったということを知って感動し、それをもとに、主人公の名前を五兵衛として英文の作品を発表しました。

その英文を学んだ中井常蔵という和歌山県内の小学校の先生が、昭和の初めに、ハーンの記事を参考にして、「稲むらの火」の文をつくり、それが国語教科書に取り入れられたのです。